

「あずきバー」で知られる井村屋（三重県）も今年3月のリニューアル時に、北米産に切り替えていた商品の一部を道産使用に戻した。同社は「道産の供給が安定してきた。道産は粒がそろっていて、ブランド力がある」とする。新商品として、道産原料のみを使った「北海道あずきバー」も展開している。

道産小豆は風味の良さなどからメーカーの引き合いが強いが、近年は小豆の作付面積が減少傾向にあったほか、2018年の天候不順による不作もあり在庫が減少。価格高騰も受け、輸入への置き換えが進んでいた。

今回、道産に戻る動きがあるのは、道産小豆を確保しやすい環境になっているため。作付けの推進により、20年産は全道2万2,100ヘクタール（前年比5.7%増）で作付け。ここ5年で最も広い作付面積で、生産量も平年を上回った。また新型コロナウイルスの影響で観光が打撃を受け、土産物の小豆需要が落ち込んだこともあり、今年9月の在庫量は4万8,162トンの見込み。前年から48%増える。

農水省は在庫量も踏まえ、一定数量を低い税率で輸入する「関税割当数量」について、今年度の小豆は前年比約32%少ない9700トンに設定。来年には原料原産地表示が義務化されることもあり、道産小豆のニーズは引き続き高まる見通しだ。

メーカーの需要に応えるには、生産量の安定確保が重要。コロナの影響で小豆価格が下がり、作付けを減らしたり、別の豆を作ったりする農家もいるが、ホクレン帯広支所は「道産に戻る動きがあり、作付面積の維持をお願いしたい」と生産者に呼び掛ける。

あるメーカーの担当者は「全道で2万ヘクタールほどをまいてもらえなくては、ショート（不足）しかねず安心できない部分がある。ただ作ってもらった分はメーカーが安定して使う責任がある」と話す。

全道生産量の7割ほどを占める十勝産小豆は、5月中旬ごろに種まきの時期を迎える。

十勝農業賞に時光さん JA士幌町畜産部次長（獣医師） 乳質改善など貢献 「初心に帰りさらに頑張る」

2021年6月19日

十勝の農業発展に貢献した農業者や農業指導者を表彰する今年の「十勝農業賞」（十勝農協連主催）に、JA士幌町畜産部次長の時光宏三さん（62）が選ばれた。獣医師として現場重視の姿勢で営農指導に携わり、酪農・畜産の発展に大きく貢献した功績が認められた。

時光さんは、1984年にJA士幌町に入職。当時は個体乳量、乳成分、乳質、繁殖成績、死廃事故率などが、十勝平均の水準を下回っていたが、85年に国内初の「士幌町乳検損防システム」を構築。乳質、繁殖成績で全道や十勝平均を上回るまでに改善させた。

さらに、「生産獣医療」の概念をいち早く取り入れ、家畜診療の指導業務をけん引したほか、国内で発生した口蹄疫（こうていえき）等家畜伝染病の防疫体制確立にもリーダーシップを発揮した。

農業共済組合の組織改編に当たっても、NOSA Iとの協調を保ちつつ、2017年度には農協家畜診療課が一般開業施設へと円滑な移行を実現した。全道の獣医師・畜産関係者が集う北海道しゃくなげ会理事を歴任したほか、現在も十勝獣医師会理事を務めている。豊富な経験を生かし、後進の育成に取り組む姿勢も評価された。

時光さんは「自分が受賞しているのかとの思いがあるが、JA士幌町や獣医師の代表で受賞したと思っている」とし、「初心に帰って、さらに頑張っていきたい」と話した。

十勝農業賞は44回目。表彰式は18日、帯広市内の農協連ビルで行われ、山本勝博会長から賞状などが贈られた。



今年の「十勝農業賞」を受賞した時光さん（中央）。右は山本会長